

最適化を目指す教育改革、他大学の教職員・学生との交流
大学コンソーシアム京都主催「第14回FDフォーラム」に参加して

大沢 暁
国際文化学部
(FD推進センター)

今回のテーマ

2009年2月28日(土)、3月1日(日)に開催された大学コンソーシアム京都主催「第14回FDフォーラム」に参加してきた。テーマは、「学生が身につけるべき力とは何か—個性ある学士課程教育の創造—」であった。テーマ設定は、中央教育審議会が2008年12月24日に出した答申『学士課程教育の構築に向けて』を意識したものである。『学士課程教育の構築に向けて』は、学生が身につけるべき力、俗に言う学士力として、学士課程共通の学習成果に関する参考指針を策定した。この参考指針は、専攻分野にかかわらず、すべての大学、学部、学科で標準として実現すべきものとなっている。因みに、参考指針(12~13ページ)の骨子は、以下の通りである。

1. 知識・理解

(1)多文化・異文化に関する知識の理解 (2)人類の文化、社会と自然に関する知識の理解

2. 汎用的技能

(1)コミュニケーション・スキル (2)数量的スキル (3)情報リテラシー (4)論理的思考力 (5)問題解決力

3. 態度・志向性

(1)自己管理能力 (2)チームワーク、リーダーシップ (3)倫理観 (4)市民としての社会的責任 (5)生涯学習力

4. 統合的な学習経験と創造的思考力

標準性の確保を目指す参考指針を満たすだけでも手一杯と思えるので、フォーラムの副題にある「個性ある学士課程教育の創造」の個性が入り込む余地はあるのか。どのように標準性と個性とは折り合いをつけるのか、期待を胸に参加した次第である。期待に応え、1日目のシンポジウムにおけるシンポジストのひとり、京都大学高等教育研究開発推進センターの田中每実センター長がひとつの解答を述べられた。

シンポジウム

シンポジウムは、山形大学の結城章夫学長と金沢工業大学の石川憲一学長の学部教育に関する事例報告で幕をあげた。山形大学は「FDネットワーク“つばさ”」と呼ばれるFD地域連携の拠点となっている。また、金沢工業大学は学生本位のユニークな教育を展開し

て、全国に名が知られている。二つの事例報告を受けて田中毎実センター長が京都大学における事例を報告するとともに山形大学と金沢工業大学の事例を相対化された。相対化とはなにかといえ、二つの大学を大学全体を代表するものとしてとらえるのではなく、置かれた状況のなかで改革を進め、環境に最適化しようとした二つの例として位置付けたということである。大学は特定の地域に置かれ、それぞれの歴史をもち、教育の面においてもおの過去の蓄積を有している。それゆえ、個々の大学は「ゼロ」から始めるのではなく、その置かれた状況のなかで改革を進め、環境に最適化しようと努めるわけであるから、他所の大学の事例を丸ごと利用することは得策でない。筆者も山形大学や金沢工業大学の事例をお聞きし、それらを丸ごと法政大学に当てはめることは効率的でないと思う。しかし、参考になる企画はあったので、そのいくつかをご紹介します。

(1) カリキュラムの「定食メニュー」(山形大学)

教養教育改革の一環として、教員の教えたい科目をそろえるのではなく、大学がその責任において学生の学ぶべきことを提供しようと、カリキュラムを「アラカルト・メニュー」から「定食メニュー」へシフトしているとのこと。カリキュラムを体系化するひとつの方法だと考える。

(2) 科目名の工夫(金沢工業大学)

「自ら考え行動する技術者の育成」という教育目標を達成するため、「技術者入門Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」(1年次Ⅰ期～Ⅲ期 各1単位 計3単位)を設置しているとのこと。「技術者入門」と「者」が入るのがみそで、学生は科目に親近感を抱くと思う。国際文化学部の科目に応用すると、「国際文化情報学入門」—文化情報学は学部の理念のひとつではあるが—は「国際教養人入門」となる。

(3) 「修学ポートフォリオ」と「キャリアポートフォリオ」(金沢工業大学)

1～4年次の学習計画あるいは卒業時の将来計画が Web 上で書き込めるようになっていたとのこと。記載は簡単、過去のポートフォリオをのぞくのも簡単なうえ、入力することによって、自己反省を促す効果がある。市谷基礎科目の英語授業において、1年生を対象に、4月最初の授業で「4年後になりたい私」というアンケートを実施しているが、それをオンライン化して、対象を全科目に拡大したもの。

分科会

2日目は第2分科会に参加し、テーマは「学生とすすめるFD」であった。午前中は、学生参加型の授業改善に関して、岡山大学、立命館大学、山形大学、畿央大学、北九州市立大学の実践報告が行われた。その後、教職員5名と学生5名とでグループを作り、昼食をとりながら、各グループで「学生とすすめるFD」について検討し、報告を行った。

以前、岡山大学の教育改善学生交流の企画「i*See2005」(Student exchange for an educational innovation (or improvement)のiを*により倒置)に参加し、教職員と学生とでグループを作り、授業改善案を考えた体験がある。今回は、時間が短く、斬新なアイ

デアを考えつかなかった。強いてあげると、他のグループのアイデアではあるが、「大学生大人宣言」があった。大学生を子供扱いして構いすぎるのではなく、大人として扱う、また、大学生も大人として行動することを宣言する、というもの。この分科会の有益な点は、他大学の教職員・学生と話をする機会をもてることにある。とくに、北九州市立大学の学生さんの言葉には感服した。北九州市立大学では、各学部から推薦された学生委員が組織されていて、学生参加型の教育改善に取り組んでいる。自分も学生委員に推薦されて、先生方に教育改善のお願いをした。しかし、先生方は授業内容・方法を変えてくださらなかった。そこで思い当たった。先生方に変わっていただく前に、自分たちが変わらないといけない。自分たち学生が変われば、先生方はそれに気づき、それにあわせて先生方も変わってくださると。

まとめにかえて

このFDフォーラムを企画した大学コンソーシアム京都、あるいは京都大学高等教育研究開発推進センターがよい例であるが、東京にも大学教職員教育研修のための相互研修型FD地域連携拠点をつくる必要がある。理由は、多岐にわたるFDに関連する事業をひとつの大学が行うのは不可能であるし、マンパワーの面からも非効率だからである。これは今後のFD活動をすすめる上で大きな課題のひとつであると思う。